

【結果】 治療開始時の臨床背景に有意差を認めなかった (A群/B群: 尿蛋白;  $1.27 \pm 1.72 / 0.98 \pm 1.12$  g/gCr, IgG;  $1,011 \pm 338 / 1,149 \pm 162$  mg/dl, IgA;  $336 \pm 178 / 332 \pm 112$  mg/dl, CD3;  $75 \pm 8 / 75 \pm 4\%$ , CD20;  $9 \pm 3 / 10 \pm 3\%$ , CD4/8比;  $1.4 \pm 0.4 / 1.5 \pm 0.5$ )。治療6か月後において尿蛋白0.3g/日未満の症例はA群4名/B群4名、血尿なしの症例はA群4名/B群5名、IgG、IgA、CD3、CD20、CD4/8比に有意差は認めなかった。これらの投与1、2、6か月間の変化率も有意差は認めなかった。

【結論】 mPSL 0.5gと1gでは免疫学的指標、治療効果に有意差は認めず、mPSL 0.5gで効果が得られると考えられた。

### P3-48.

#### 閉塞性動脈硬化症の病変部位と $\omega$ 脂肪酸に関連に関する研究

(心臓血管外科)

○岩崎 倫明、西部 俊哉、鈴木 隼  
室町 幸生、藤吉 俊毅、岩堀 晃也  
猪野 崇、高橋 聡、戸口 佳代  
神谷健太郎、岩橋 徹、小泉 信達  
萩野 均

(公衆衛生学)

安部由美子、井上 茂

【背景】 近年、閉塞性動脈硬化症 (ASO) の危険因子としてEPAやDHAの様な $\omega$ -3系脂肪酸との関連が指摘されている。

【対象と方法】 2011年8月から2013年11月までの98例 (男性79、女性19、 $73.0 \pm 7.3$ 歳) が対象。喫煙の既往72例 (73.5%)、喫煙中37例 (37.8%)。平均BMI:  $22.4 \pm 3.3$ 。高血圧72例 (73.5%)、脂質異常症50例 (51%)、DM43例 (43.9%)、IDDM18例 (18.4%)。既往症は、脳梗塞31例 (31.6%)、心筋梗塞36例 (36.7%)、血液透析13例 (13.3%)。ASOの重症度は、重症虚血肢 (Fontaine III/IV度)26例 (26.5%)、平均ABIは $0.56 \pm 0.21$ であった。患者を末梢動脈病変 (鼠径部以下の動脈病変) を有する患者72例と有さない患者26例に分けて、 $\omega$ 脂肪酸と各因子 (年齢、性別、BMI)、重症虚血肢、ABI、高血圧、脂質異常症、糖尿病 (DM)、脳梗塞・心筋梗塞の既往、血液透析との関連を検討した。

【結果】 DHA  $139.2 \pm 53.3$ 、EPA  $70.45 \pm 41.37$ 、DHA/AA  $0.83 \pm 0.32$ 、EPA/AA  $0.42 \pm 0.24$ 、T-Chol  $176.4 \pm 36.2$ 、HDL  $46.3 \pm 13.9$ 、LDL  $99.8 \pm 33.5$ 、TG  $151.7 \pm 85.9$ 。末梢動脈病変に有意な危険因子はABI低値、DHA低値、EPA+DHA低値、TG高値、重症虚血肢、糖尿病、IDDMであった。多変量解析では、末梢動脈病変の発症に有意な独立危険因子はABI低値 ( $p=0.010$ )、DHA低値 ( $p=0.037$ )、重症虚血肢 ( $p=0.045$ ) であった。

【結語】 末梢動脈病変の存在がABI低値、重症虚血肢の原因となる一方、DHA低値が末梢動脈病変の発症につながっていると推測された。DHAはEPAと異なる抗動脈硬化作用を有していると考えられた。

### P3-49.

#### Person-Centered Careの概念分析 — 慢性疾患患者ケアにおいて — (第2報)

(医学部看護学科)

○山岸 直子

【目的】 慢性疾患患者ケアにおける person-centered care の概念を明確にする。

【方法】 概念分析の方法は、Rodgers (2000) の概念分析のアプローチ法を用いた。文献の抽出は、MEDLINE、CINAL、医学中央雑誌を用いて行った。分析は、帰納的、主題的な方法で実施した。

【結果】 属性として、〈患者と看護師の信頼関係の構築〉、〈患者の自己管理に向けた患者と看護師の協働〉、〈患者の家族・重要他者も含めた全人的ケア〉、〈患者の視点を自己管理に組み込んだ個別的ケア〉、〈患者ケアの調整〉、〈患者の自己管理能力の発展〉の6つが明らかになった。先行要件としては、〈組織的ケア環境〉、〈看護師の価値・信念、態度〉、〈看護師の能力〉、〈看護師の経験の内省〉、〈患者の人口統計学的な特質〉、〈患者の価値・信念〉、〈患者のパーソナリティ、コーピングパターン〉、〈患者の能力〉、〈患者の経験〉の9つが見出された。帰結として、〈患者のヘルスアウトカムの向上〉、〈経済的効果〉、〈患者の医療者とのコミュニケーション能力の向上〉、〈患者のケア満足度の増加〉、〈ケアの質の向上〉、〈看護師の看護援助における満足度の増加〉の6つが見いだされた。

【考察】 person-centered care は看護師と患者の両者の取り組みを表す概念と言える。慢性疾患患者の自己管理は、患者自身が取り組むものであるため患者の自律性を尊重し、患者と協働したケアが重要である。また、看護師の要素が person-centered care の実践に影響を与えることが明らかとなり、看護師の役割や倫理観に関する教育、専門的知識の習得、経験を振り返り実践に生かす努力が重要と言える。さらに、家族も含めたケアが重要であることが強調された。

### P3-50.

#### 当院における向精神薬の処方実績調査

(柏崎厚生病院：精神科)

○野村健太郎、松田ひろし

向精神薬多剤併用による治療は、医学的なデメリットが報告されているだけでなく、医療費の負担増大といった観点からも見直しが求められていた。2014年6月、国は精神神経学会専門医資格保持者を対象に向精神薬の処方実績調査を行なった。そして、2014年10月1日より向精神薬多剤併用は診療報酬の減算の対象となった。

こうした状況の中、病院における向精神薬多剤併用の報告は少ない。そこで、当院における向精神薬の処方内容の実態について調査を行なった。全体として、当院においては全国平均と比較して向精神薬の多剤併用症例数が極めて少ない事が確認された。その要因について検討する。

### P3-51.

#### 乾癬における生物学的製剤の有効性と QOL・患者満足度評価の検討

(皮膚科)

○松本 由香、室 繭子、川上 洋  
阿部名美子、坪井 良治、大久保ゆかり

(戸田中央総合病院：皮膚科)

藤城 幹山

(上尾中央総合病院：皮膚科)

平野 宏文

乾癬患者では quality of life (QOL) が著しく低下

していることが近年報告されている。また、患者の治療に対する満足度と医師による改善度の評価の間にはギャップがあることが指摘されている。生物学的製剤がもたらした高い臨床効果により、患者の QOL は改善されたと期待される。従来治療では一般に PASI75 を治療目標としてきたが、生物学的製剤の登場により PASI90 を目指すことが可能となった現在、患者の求める治療ゴールもより高いものに変化していることが推察される。今回我々は、当科で生物学的製剤（インフリキシマブ [IFX]、アダリムマブ [ADA]、ウステキヌマブ [UST]）を導入した中等度から重症の尋常性乾癬・関節症性乾癬 62 例の、52 週後における生物学的製剤の有効性と QOL・患者満足度を評価した。皮膚症状の改善度評価には PASI スコアを用いた。QOL の評価には VAS による判定（痒痒、爪病変、関節痛、外用薬のストレス）、および Skindex-16、DLQI、GHQ-28 による評価を行い、治療満足度についてのアンケートを実施した。52 週後に PASI75 を達成した症例は 50～80% であった。24 週後には 55% の症例が DLQI スコア 0～1（影響なし）に至り、同時点での PASI75 の達成率にほぼ一致した。Skindex-16 スコアは早期から有意な低下がみられ、特に“機能”の評価で改善を認めた。GHQ28 スコアの症状あり(>6 点)患者率も有意に低下し、下位項目では“うつ傾向”の評価において特に改善を認めた。52 週後における治療の満足度は、約 85% の症例で“やや満足”以上との結果であった。生物学的製剤による治療では、皮疹の改善に加え QOL・患者満足度の改善を加味した治療の選択、治療目標の設定をすることが重要と考えられた。

なお発表者は、文部科学省 女性研究者研究活動支援事業（一般型）による研究活動補助者配置を東京医科大学医師・学生・研究者支援センターから受けている。